

第1回県民会館の整備のあり方に関する有識者会議 議事録

- 1 日 時 平成31年2月14日(木)
午前9時30分から午前11時30分まで
- 2 場 所 宮城県行政庁舎9階 第一会議室
- 3 出席者
○出席者(委員):志賀野桂一委員(座長),天沼ひかる委員,片山泰輔委員,
佐藤淳一委員,佐藤寿彦委員,中田千彦委員,樋渡宏嗣委員
(事務局):後藤康宏環境生活部長,鈴木文也環境生活部参事兼消費生活・
文化課長,金野さよ子消費生活・文化課課長補佐(総括担
当),平泉健消費生活・文化課主幹(文化振興班長)
○欠席者:なし
- 4 議 題 県民会館の整備のあり方について
- 5 配付資料
＜資料一覧＞
資料1 県民会館の整備のあり方の検討状況・・・・・・・・・・ P. 1
資料2 県民会館の概要・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 3
資料3 県民会館の課題・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 5
資料4-1 県民会館需要調査・・・・・・・・・・・・ P. 7
資料4-2 県民会館需要調査(抜粋)・・・・・・・・ P. 9
資料5 県民会館の整備のあり方に関する有識者会議について・・ P. 11
資料6-1 拠点文化施設が担う機能について・・・・・・・・ P. 13
資料6-2 他県(市)の拠点文化施設が担っている機能等の例・ P. 15
＜参考資料一覧＞
参考資料1 仙台駅周辺の主要ホール施設位置図と県民会館・・・ P. 17
参考資料2 県民会館大ホール・・・・・・・・・・・・ P. 19
参考資料3 県内ホール施設分布図・・・・・・・・・・・・ P. 21
参考資料4 県民会館大ホール利用内訳・・・・・・・・ P. 23
＜別紙一覧＞
別紙1 県民会館の整備のあり方に関する有識者会議設置要領・・ P. 25
別紙2 県民会館条例・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 27
別紙3 劇場,音楽堂等の活性化に関する法律・・・・・・・・ P. 37

6 概 要

- (1) 開 会
- (2) 挨拶 環境生活部長 後藤 康宏
- (3) 委員及び事務局紹介
- (4) 座長の選任
- (5) 議 事
県民会館の整備のあり方について
- (6) そ の 他
- (7) 閉 会

7 議事内容

有識者会議は、県民会館の整備のあり方に関する有識者会議設置要領第4条第2項の規定により、座長が進行することから、座長に選出された志賀野桂一委員が議事進行を行った。

はじめに事務局から配付資料の概要を説明した。

【事務局 鈴木消費生活・文化課長】

それでは、事務局から、これまでの県民会館の整備のあり方の検討状況等について、1ページの「資料1」を中心に御説明いたします。

「資料1」を御覧ください。

まず、Iの「県民会館の概要」についてですが、1「設置目的」は、「本県の文化芸術活動の拠点施設として、文化芸術活動のための施設の提供、文化芸術を鑑賞する機会の提供、文化芸術活動に参加する機会の提供などの活動を行うために設置する」というものです。

2「運営形態」は、平成18年4月から指定管理者による管理運営となっており、指定管理者は、指定管理者制度導入以来、記載の共同企業体が担っています。

3「施設内容」は、記載のとおりで、1590席の大ホール、楽屋10室の他、大中小会議室、展示室、リハーサル室などを備えております。

ここで、県外からおいでいただいている委員もいらっしゃいますので、立地環境について若干触れさせていただきます。恐れ入りますが、17ページの「参考資料1」を御覧ください。左側に「立地場所の地図」を掲載しております。現在の立地場所は、仙台市内の中心部に位置し、「SENDAI 光のページェント」など様々なイベントが実施される「定禅寺通」に面しており、仙台駅から地下鉄でおよそ15分、交通アクセスも大変良い立地となっております。

一方で、「図2」にありますとおり、敷地に余裕がなく、周辺道路も北側、西側が一

方通行で、機材搬入車両の出入りが大変しづらい、と従来から指摘されております。都市計画法上では、市街化区域、商業地域に該当します。

なお、裏面18ページには、周辺の道路状況が分かる外観の写真も添付してございますので、御参照ください。

19ページの「参考資料2」には、「大ホール1階平面図」、観客から寄せられております、「座席が狭い」、「トイレが少ない」などの解消が望まれている事項を記載しております。なお、3ページの「資料2」には、「県民会館の概要」の詳細を添付しておりますので、後ほど御確認願います。

次に、資料1のⅡの「県民会館の現状と課題」について御説明します。

まず、1「現状」としましては、開館から54年が経過して老朽化が進み、過去2回の大改修工事をはじめ、過去5年でもボイラーや電気・空調設備など、約6億円に上る修繕等を実施しております。

次に、2「課題」ですが、先ほど「参考資料1」で御確認いただいたとおり、敷地が狭く資材搬入が困難なこと、現地建て替えを選択する場合は、現在の建物を解体してから新築工事に入らなければならないなど、長期休館が見込まれるなど、立地上の課題があります。

また、経年劣化による建物の摩耗、損傷や設備の老朽化による故障リスクが常に付きまとっていること、座席が狭い、トイレが少ない、バリアフリー化が遅れているなど、来場者に対するアメニティが低いこと、などがあげられ、ホール利用者にとっては、ホールの稼働率が高く、予約が取りづらいという声が多く寄せられています。なお、詳細につきましては、5ページの「資料3」にまとめてございますので、後ほど御確認ください。

次に、県民会館需要調査の前に、「仙台市の動向について」、若干触れさせていただきますので、「資料1」のⅢ「仙台市の動向」の欄を御覧ください。

仙台市では、平成29年10月に「仙台市音楽ホール検討懇話会」を設置し、新たな音楽ホールの整備について検討を進めております。その検討結果もほぼまとめ、3月の年度末には市長に報告書を提出する予定と伺っております。

検討の過程で既に示されている、新たなホールの規模と機能は、「2千席規模で、音響重視の高機能・多機能ホール」というもので、今年度は立地候補地の検討も進められているところでございます。

このような、仙台市の動向も踏まえまして、県民会館の需要調査を実施しましたので、次に、Ⅳ「県民会館の需要調査」を御覧ください。

まず、調査目的でございますが、老朽化が進む県民会館の整備のあり方を検討するにあたり、仙台市が音響を重視した高機能な2千席規模の多機能ホールの整備について、検討を進めていることを前提に、県民会館の潜在的、将来的な需要を見込んだホ

ールの規模や機能などの把握と、今後の整備検討に活用するための基礎資料を得ることを目的に実施したものでございます。

2「調査時期」及び3「主な調査内容」につきましては、記載のとおりで、4「調査結果の概要」につきましては、「調査総括」として、「現在の県民会館の高稼働状況及び仙台市内のホール不足への対応を考慮すると、県が2千席規模の施設を整備しても、施設の過剰供給となることは想定されにくい」という結論が導かれております。

以下、調査結果のポイントにつきまして、御説明します。

(1)「県民会館の利用状況」ですが、興行公演が主体で、集客数1千3百人以上の公演が6割を超え、稼働率は8～9割と高い水準で利用されている状況にあります。

(2)「県内の興行状況ジャンル分析」ですが、音楽とステージの公演比率を見ますと、県内の特徴として「ステージ公演の割合が極端に低く、ステージ公演に適したホール不足の影響と考えられる。」となっております。

(3)「ホール施設利用者へのヒアリング状況」ですが、「大手利用団体11団体中9団体がホール不足を訴え、新たに2千から2千5百席規模や、千5百から2千席規模の多目的ホールを求める声」がございました。また、「県内外の教育機関・団体では千8百席以上を希望する意見が最も多く、3割を占める、という結果となっております。

(4)「県民会館に求められる方向性」ですが、県内にホール施設を整備する際は、「大型ミュージカルやポップスなど、ステージジャンルの大型興行への対応を考慮した大規模施設」、「地元劇団や県民が利用しやすい中小規模の劇場」、あるいは、「仙台市が検討を進めている新ホール施設との機能棲み分けや、県民会館がこれまで担ってきた音楽及び演劇などのステージジャンルの興行公演をこれまで以上に振興する施設整備が求められている」と結ばれております。

なお、関連資料として、7ページ以降に資料4-1、4-2を、21ページ以降に参考資料3と4を添付しております。また詳細につきましては、事前に送付させていただいております、調査業務報告書で、御確認いただければと思います。

最後に有識者会議の協議事項等についてですが、11ページの資料5を御覧ください。

3に「主な協議事項」とありますが、県民会館の施設整備の基本的な方向性や、新たな県民会館に求められる機能、規模及び立地条件などについて、御意見や御提案をいただきたいと考えており、8月頃までの4回の会議で、一定の方向性をとりまとめたいと考えております。

機能・規模の検討にあたりましては、13ページ以降の資料6-1と6-2に、国内で近年整備されたホールや都道府県ホールなどの事例から見た「拠点施設が担う機能」を整理した資料を添付しておりますので、参考にいただければと存じます。

【座長：志賀野桂一委員】

ただいま事務局から説明がありましたが、この需要調査報告書も370ページにわたる大調査です。これについては、委員の皆様は、事前に目を通していただいているという前提で話をまとめていただいたと思います。

今、御説明のあった中で、まずは御質問があれば承りたいと思いますが、よろしくお願ひいたします。

【佐藤淳一委員】

音楽とステージというジャンルの分け方になっていますが、我々がやっているオペラはどちらに分類されているのかを教えてくださいませんか。

【事務局 鈴木消費生活・文化課長】

どちらにもかかるといったような中身になってきますが、どちらかというとならステージ系でまとめられていると我々は認識しております。

【佐藤淳一委員】

わかりました。私は仙台市で「楽都・仙台に復興祈念『2千席規模の音楽ホール』を！市民会議」に仙台オペラ協会として関わらせていただいて、その主要なところに少しいて、最初の部分ですが仙台市のホール関係にも関わらせていただいて、ここでも市民の方々に様々な調査を、アンケートを取るとか、署名をしていただくということをしてきたのですが、この圏内に2千席規模のホールが本当に二つ必要なのかというところが、何ともうまく理解できないで今日お伺いをしました。

このあたりの数字、どのくらいの数を調査されたのかというのを、この需要調査報告書ではなかなか見つけられなかったもので、教えてくださいませんか。

【事務局 鈴木消費生活・文化課長】

この県民会館の需要調査ですが、調査方法を御説明させていただきます。

まず1点目です。県内のホールの状況ということで、1千席以上のホールの利用状況、12施設ございますが、こちらに対する利用状況等のアンケート調査を実施しております。

それから、2点目です。県民会館自体の利用状況、過去3年間の実施イベント、入場者数について、実施主体、あるいは公演ジャンルごとに分析してございます。

それから、3点目、宮城県内の興行公演ジャンル分析といたしまして、一つは統計資料に基づく全国的な興行公演と県内の興行公演を比較・分析してございます。もう一つは、本県と類似または同規模程度の静岡県、広島県における興行公演の傾向を比較・分析してございます。

それから、大きい4点目でございますが、ホール施設利用者へのヒアリング・アンケートを実施してございます。これもさらに三つに細分化されておまして、一つは県内外の文化団体、その中身はアマチュア交響楽団、美術・舞踊・民謡等の団

体，県内外の劇団など155件にアンケートを送付しまして，うち52件から回答がございました。それから，教育機関・団体に対しまして同じようにヒアリング・アンケート調査を実施しました。こちらは，仙台市内の小中学校，県内の高校，大学，県内外の県民会館の利用実績等がある高校文化連盟など420件にアンケートを送付しまして，うち128件から回答がございました。

【事務局 金野消費生活・文化課長補佐】

ただいま御説明しております資料，皆様のお手元に，右肩に資料4-2というもの，ページ数で9ページになりますが，この左上，調査方法というところで，今回の需要調査の調査方法についてまとめております。

【事務局 鈴木消費生活・文化課長】

これが3百数十ページに及びます需要調査のエッセンスという形でまとめております。

【座長：志賀野桂一委員】

御質問というよりは，御意見の部分に入っているのです，先に発言の押さえをしたいと思いますが，音楽とステージという分け方がとても微妙で，音楽の中にクラシック系とポップス系というものが含まれるのか，確認したいのですが。

【事務局 鈴木消費生活・文化課長】

音楽につきましては，クラシック系とポピュラー系を含んでおります。

【座長：志賀野桂一委員】

含むということですね。それから，ステージというのは，今おっしゃったようにオペラというのは当然ステージ系ですが，音楽系でもあります。ミュージカルも同じく音楽と劇というものが一体になっているジャンルです。そういう意味では，本当は完全に分かれているのではなくて，丸を書けば少し被っている部分があります。それを前提にこの音楽系とステージ系に分けたときに，オペラとミュージカルは音楽のほうではなく，ステージ・演劇系に分けたという認識でよろしいのですか。

【事務局 鈴木消費生活・文化課長】

はい，そのとおりでございます。

【座長：志賀野桂一委員】

こうした前提で，この調査が行われているということです。

【佐藤淳一委員】

わかりました。ありがとうございます。

【座長：志賀野桂一委員】

では、そのほか。はい、どうぞ。

【片山泰輔委員】

ハード面に関する質問ですが、老朽化が大分進んでいるということですが、このまま修繕をしながら使い続けるとすると、何年ぐらいは使える見通しでしょうか。新しく建て替えるとなった場合、どれぐらい猶予というか、時間的にこちらが検討したり、準備したりする余裕があるのか、それとも猶予がないのか。

【佐藤寿彦委員】

マグニチュード9.0に耐えていますからね。大きい地震が2回来ていますが、大丈夫でしたから。

【片山泰輔委員】

そうすると、10年ぐらいは、一応使い続けることはできるといった環境でしょうか。

【座長：志賀野桂一委員】

今のお尋ねは、老朽化の程度ということで、現状でどのぐらいの期間までもつかということですか。

【片山泰輔委員】

そうです。

【事務局 鈴木消費生活・文化課長】

耐震化の診断等は実施しておりますので、今すぐどうこうということは躯体自体にはないと思いますが、ただそれが何十年ももつかという点と、一番我々が日々心配しているのは、設備関係が止まってしまいまして、興行とか舞台に穴をあけてしまうのではないのかというのを非常に危惧しております。実際、音響関係とか電気関係の修繕になりますと、既に部品が製造されていなくて全面的な入れ替えにしなければならない。そうしますと、そういった費用的なものもありますが、工事の期間にも大変影響を及ぼしまして、興行主に大変御迷惑をかけている部分もございます。

【座長：志賀野桂一委員】

極端に言うと、もたないということでしょうか。数年はもつかもしれないが、10年以上はもたないと、こういう捉え方でよろしいですか。

【事務局 後藤環境生活部長】

県としてこの検討を始めて、最終的に建築するということになり、建築が仕上が

るところまでを考えると、その検討の期間が通常は4、5年かかるだろうと思っていて、その期間は当然もつだろうと思います。コンクリート構造物としては今50年ですので、これまで補修等をして、耐震化改修もしていますので、コンクリート構造物が通常は6、70年もつと言われていると思いますので、そういうスパンで考えられると思っております。

【座長：志賀野桂一委員】

そのほか御質問はよろしいでしょうか。それでは討議に入っていきたいと思えます。

ただいま御質問をいただきましたが、次は事務局の説明を踏まえまして、今後の県民会館に求められる基本的な方向性につきまして、お一人ずつ御意見を賜りたいと思えます。

それでは、名簿順にお願いしたいと思えますが、天沼委員からよろしくお願ひします。

【天沼ひかる委員】

私は、横須賀芸術劇場の経験からしか申し上げられないのですが、横須賀芸術劇場は開設から25年経っているところで、劇場ができた当初は、舞台設備に関しては日本一という状態でした。実は、新国立劇場のプロトタイプが横須賀芸術劇場のようであり、裏も表も非常に似ていると言われます。

横須賀芸術劇場は貸館も積極的にやっておりますし、主催事業も積極的にやっておりますが、例えばポピュラーのコンサートに関して、舞台設備上で使える技術的なものがここ何年で全く変わってしまい、照明のLED化や、音響のデジタル化など技術的に追いつくのが大変です。それができないと、使ってもらえない劇場ということになってしまうことを私たちは危惧しています。そういったこともありますので、将来のこと、建つホール、劇場という名がつくかもわかりませんが、将来的にそれを使ってどういったことを行っていくかというのが、その建物の全体の規模などを大きく左右すると思えます。

今、築何年の会館・ホールが県内に様々あるかと思えますが、最近のテクノロジーを使って建てられているものは先々長いと思えますが、横須賀芸術劇場でさえ25年でこのような形になっておりますので、これから先に大規模改修を計画しても、工事が始まるのがおおよそ8年後というくらいに時間がかかるものです。その長さや時代のテクノロジーの変化が合わないことに対して悩んでいるところです。

今ここで県民会館の整備をするならば、先のことを考えた上で、何十年もつものを一気に環境を整えるのがいいのではないかと思います。どのように運営されるかというのは、それぞれの場所にとっての意向や要望があり、特徴があることですので、どれがベストかというのは言えませんが、横須賀芸術劇場は何もなかったもので、運営している財団が頑張ったというところでしたが、そうでないもともとの下地や、環境があればそれ以上のことはできると思えます。

【座長：志賀野桂一委員】

ありがとうございます。もう少しお聞きします。

私も、横須賀芸術劇場ができた当時、すぐに見せていただきました。素晴らしいホールでして、ホールとしては、ステージ系と音楽系という区分でいうと両方に対応できる仕組みを持っています。このあたりは、市民からどう捉えられているか、それが良かったかどうかという評価はいかがですか。

【天沼ひかる委員】

まず、舞台につきましては、基本的に奥舞台がないだけで、左右にメインステージが同じスペースをそれぞれ持っております。

【座長：志賀野桂一委員】

一つは、ステージ系、つまり劇場系に使えるということですか。

【天沼ひかる委員】

はい。それは完全なことですが、バトン数に関しても40何本、これは今、油圧から電動に変えられないという問題もあります。細かい演出に対する態勢がとられているということ。それから、めったに使わないのですが、セリが両側からスライディングステージを前と後ろと使えるようになっていて、大きな舞台転換にも対応できるということ。照明ももちろん、バトン数についても同様ですが、大は小を兼ねるということになっています。

また、シェルター型の反響板、これも使い勝手については問題がありますが、それを出すことによってクラシックの公演でも十分に音響的に素晴らしい、とても良い評判をいただいています。そういう状況を作る事ができるため、ある程度なら何でもできるというところが、市民に限らず、定評をいただいているところです。

【座長：志賀野桂一委員】

最後におっしゃった、自走式の音響反射板というのを備えているのが横須賀芸術劇場の特色です。それを出すことによって、先ほどのステージ系と音楽系といった区分であれば、音楽系に、音楽の中でも特にクラシック系に対応できる構造を持っているということなんです。

それでは次に片山委員、お願いします。

【片山泰輔委員】

仙台の劇場に詳しくないので、少し的外れなことを申し上げるかもしれませんが、この需要調査などを拝見しますと、宮城県内にはポピュラー音楽などの興行系の催しをやる場所が足りないのだろうと思いました。仙台市が整備するのはクラシック音楽を軸としたコンサートホールということになりますので、県が整備するのは、ポピュラー音楽や商業系のミュージカルをやる施設になります。ただし、こうした分野は、民間による整備があれば、必ずしも行政がやらなくてもいい領域かと思

ますが、仙台の現状を見て、それが「ない」のであれば必要で、宮城県から東北地方全体の需要を考えても必要ではないかと思います。そう考えた場合、2千席規模のホールをつくらうとすると今の敷地では無理なので、ほかの場所につくることになると思います。ほかの場所で作るのであれば、2千席規模のホールだけを作るよりも、本来、県としてやるべきことをきちんと整理して、複合的な機能を考えていく必要があるかと思います。

この需要調査の中でも、演劇の創造などにも使えるような、もう少し小さな規模の施設が必要とありますので、県として、仙台市が必ずしもあまりやっていないようなところを見ながら、創造型の施設をつくることもあります。また、県は広域自治体です。仙台市だけではなく、県内のほかの基礎自治体をみると、例えばえずこホールや多賀城市文化センターは、かなり積極的にいろいろなことをされている。これらのネットワークのハブになるような機能とかもありますし、県内の必ずしも文化的環境に恵まれていないような地域に対するアウトリーチとかもあります。市町村ではできないところを県が補うということが必要です。文化政策上、必要とされる機能としては、創造と普及が重要ですが、こうした機能を持ちながら、同時に商業的な2千席規模のホールを持つような、そのような複合施設がいいのではないかと思ったところです。

場所としては、もう現在地では無理なので、どこか適切な場所で考える必要があるのではないかと思います。需要調査の報告書を読み、昨日現地を視察させていただいて、現在地での立地には限界があるということを感じたところです。

【座長：志賀野桂一委員】

ありがとうございました。非常に重要な、文化政策的な見地からの御意見でしたが、繰り返しますが、機能という面では、一つは商業系のようなものに特化する。それは仙台市が計画しているものとの棲み分けとしての方向ではないかというのが、一つ重要な意見です。

それからもう一つは、現在地における、この2千席規模のホールをつくり、その他の機能を盛り込むとなると、今の敷地では難しいのではないかという御意見です。では、次に佐藤淳一委員、どうぞ。

【佐藤淳一委員】

先ほどもお話をしましたが、仙台市でも2千席規模のホールをつくる計画があり、県民会館も2千席規模のホールという話が出たときに、私は戸惑いがありまして、30年ぐらい仙台に住んでいて、自分たちがホールを利用している中で、2千席規模のホールが二つ必要なのかという戸惑いが、自分の中にあります。

一方で市民にとっては、選択肢が増えるのはありがたいことですので、県民会館が新しくなるというのは大歓迎だと思いますが、その規模のことは別にして、自分たちがオペラで県民会館を使っているときに、オーケストラピットがありますが、全て座席や床板を外して、鉄骨を外してという作業で、これらを外すことと組むことが大変な重労働になっています。今はボタン一つでできるような時代ですので、

そうした機能を考えてもらえるようなホールができるとうれしいと思っています。また、舞台の奥行きも現状ではコミアガリが狭く、舞台の袖も狭い。客席数だけの問題ではなくて、今の敷地の中でホールを広げて使いやすい舞台にしていこうと思うとなかなか厳しいと思っています。

先ほどからお話があるように、市と県でうまく役割を分担できるような、そういったホールができて、いろいろな可能性や選択肢があって、我々市民が使わせていただけるのであれば、今以上に歌劇などの活動の幅がもっともっと広がっていくと思っています。

そのようなホールが県民会館として、また、県民にとって何がいいのかというところでは、我々は仙台市に住んでいますので市民にとっての選択肢の一つということですが、県民会館ですので、県民にとって何がいいのかというところも頭の中から忘れてはいけないと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

ありがとうございました。今の御意見を集約しますと、県民にとっての選択肢の増加として、ホールを追加的に提供されることに期待が持てるということ。ただし、その機能分担などを考慮すべきで、キャパシティだけの問題ではないという御指摘です。そのあたりをどのように設定をするのかということなのです。

一つの例として、オーケストラピットの話が出ました。私もよく使わせていただくのですが、今の県民会館は大変です。様々な機能劣化があるのはもちろんですが、オーケストラピットが一番の問題です。オーケストラピットが関係するジャンルは、オペラ、ミュージカル、バレエ等の話になります。そのほかのジャンルはあまり関係ないのかもしれませんが、深刻な状況にあるということなので、一刻も早く解決を、という意味もあります。

そういった新しいタイプ、新しい時代のホールというのは、仙台圏内にはないのが現状ではないかと、私の意見も追加しますが、そのように思います。

では次に、佐藤寿彦委員、お願いします。

【佐藤寿彦委員】

僕は興行を中心としてやっている立場なので、興行見地でお話しします。僕は興行という言葉あまり好きではないので「コンサート・ライブ」という言葉を使っています。

日本のライブマーケット（ロックやポピュラーミュージック等のコンサート）のお話をしますと、我々の団体 ACPC（一般社団法人コンサートプロモーターズ協会）はいろいろな話を国や自治体とも進めております。

この10年でライブマーケットの売上規模が3倍から4倍になっています。多くの人々がコンサート・ライブに足を運んでいるためです。そこで我々は会場不足や諸問題を解決するために一般社団法人日本トップリーグ連携機構の川渕三郎さんと ECSA（一般社団法人 Entertainment Committee for STADIUM・ARENA（略称：ECSA（エクサ））を設立する予定です。これによりバスケットボールなどスポーツとコンサート・ライブが

共有して活用できる場所を日本国内に数十箇所つくろうといった話も出ています。また、オリンピック・パラリンピックも含め社会問題となっておりましたライブやエンターテイメントのチケット転売防止法案が昨年12月8日に参議院を通過しました。これも我々のACPCが関わって成立させました。

なぜライブがこれほど盛んになったかといえば、片山委員がおっしゃったようにテクノロジーの進歩があって、昔は音楽をレコード盤で聞いていたのが、その後CDになり、今はネット配信、無料（の場合もある）で音楽が聞けるようになりました。テクノロジーの進歩が人々のライブ、コンサートにも行こうという流れを作りました。それでライブが好調になっています。

ただし、ネット配信、無料で音楽が聞けるからということよりも、演者、例えば東北大の工学部を卒業された小田和正さんは71歳です。それでも小田さんは東京ドームや宮城県のグランディ21のステージを走り回ります。小田さんのライブの観客は90歳の方もいますし、10代、20代の方も多く見られます。また、コアなファンが小田さんと同世代なので、60代から70代の方が2時間以上のライブを何度も立ち上がってライブを観ています。何を言いたいかというと、現代社会ではライブ型の音楽産業になっていると思います。

一方でホール行政では、山形県でも総合文化芸術館を約170億円規模でつくっています。また、秋田県もホール施設をつくろうとしています。全国的に200億円ほどの予算で2千席規模のホールをつくろうという流れになって、我々が見るとどの会館も金太郎飴のようです。

また、ホールというのは難しい定義であって、我々がやっているライブやコンサートの中には、県民会館のように客席が固定椅子の会場でライブを行う場合もありますし、立ったまま2時間、3時間にわたってライブを行う会場もあります。県内では立ったまま（スタンディング）の会場として、東日本大震災の復興支援プロジェクトでつくられた長町にある仙台PITという会場がありますが、そこは1500人が立って観られる会場、ホール施設です。その建設費は約15億円と聞いています。山形県の総合文化芸術館は固定席2001席で170億円、仙台PITでも1500人規模のライブが出来ます。山形総合文化芸術館と仙台PITの収容人員数ではあまり違いはありません。

ゼビオアリーナ仙台は30億円程度でつくっていて、ライブ仕様の場合4から5千人規模の観客が入りますので、コンサートは成立します。利府町にあるグランディ21は8千人から9千人規模の観客が入ります。また、このグランディの体育館はライブ開催需要が多く日程確保が大変な状況です。

それでは、現状の県民会館の需要がどれくらいあるのかというと、ここに需要調査の報告書がありますが、我々の業界からすれば、極端な話をすると弊社だけでも今の県民会館を毎日使えるでしょう。それだけ県民がライブを見に行きたいという需要はあると思います。もう一方で、「ライブツーリズム」という形で現在、インバウンドもそうですが、全国各地にコンサートを求めて多くの日本人たちが動いています。ちなみに、宮城県や村井知事と相談して開催させていただいた、「嵐」のライブを宮城スタジアムで行いましたが、その際には全国から22万人が来場しました。

今やライブを追いかけて親子三代、家族で、沖縄から北海道まで移動しています。まさに「ライブツーリズム」です。またアジアの方々もかなり日本にライブを観に来ています。「コト消費」ということです。

因みに弊社主催で毎年4月に6万人規模の野外ロックフェスを宮城県川崎町の野外の会場で開催していますが、観客の4割程度の観客が関東から来ています。6万人の4割ということは2万4千人です。県民会館の整備は、県内だけのくくりで考えるのか、交流人口を増やすのかということも頭に入れないと、なかなか議論しにくいのではないかと思います。我々の業界ですが、需要はものすごくあります。どういう形がいいかと思うと、片山委員がおっしゃったように文化的なことを決めて、天沼委員がおっしゃったように最新の、10年後、20年後を見据えたテクノロジーを導入すること、アジアにも誇れるような、一方でなるべくお金を使わない、ローコストでやる、さらに言えば、災害のことも考えながら、席数だけでなく収容人数が多いといったことを考えながら、費用も200億円ぐらいはかかりますから、県民1人当たり9千円ぐらい負担しなければいけないので、県民の方が喜んで、交流人口が増えて、経済的に豊かで、テクノロジーを満載にして、メンテナンスが簡単な、そして運営で歳入を多く、つまり会場使用料がたくさん取れるということです。立地に関しては最後になるでしょうが、そういった県民が納得するような会館が望まれるのではないかと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

多様な観点の示唆をいただきましたが、ライブという観点からすると、小さいホールから9千人規模までのホール需要があるということでしょうか。

【佐藤寿彦委員】

いや、大規模なものはドームですね。

【座長：志賀野桂一委員】

ドームになるともう少し大きい話ですか。

【佐藤寿彦委員】

札幌では2つ目のドームをつくらうとしています、宮城にドームがあっても集客は問題ないと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

佐藤寿彦委員からは、ライブ環境の観点から、この会議の検討の俎上に上っている会館がどうなのかという評価です。もう一つ、大事な話としては、10年後や20年後の音楽環境でしょうか、ライブ環境というのは大分変わるであろうと。そうしたものを先取りする必要性もあるのではないかと聞きました。

そこでお聞きしたいのは、2千席規模のホールという、検討の俎上に上っているものに対しては、あまりコメントがなかったようですが、それをいただけますか。

【佐藤寿彦委員】

まずコストの問題です。愛媛県が松山市に3千席の県民文化会館をつくりました。そうすると、東京からアーティストがライブツアーで全国を回りますが、四国はアーティストの日程の制限などで1か所しか行けないとすると松山市に行きます。四国では高松市の2千席の香川県民ホールでアーティストがライブを開催していましたが、松山に3千席の会場が新設されたところ、高松では集客力があるライブ開催が減少したという話もあります。

また、僕の記憶では、80年代後半、90年ぐらいの日本経済新聞に、「なぜユーミンが来ない」という記事があって、経済産業省で調査をしたらしいのですが、それはキャパシティの問題ではないだろうかという記事がありました。やはり収容人員数が重要ではないでしょうか。収容人数が多いほど有名なアーティストは会場を使用する確率が上がるということです。

我々が主催しているライブでは、機材運搬用トラックがたくさん走ります。例えばグランディ21の8千席のアリーナライブの場合は、11トンのトラックが30から40台ぐらい走ります。宮城スタジアムの場合11トントラックが約150台走ります。県民会館クラスだと多いときには11トントラックが10台近く走ることがあります。よってかなりお金がかかります。収容人数が多いほど、集客力があるミュージシャンや主催者は勿論、観客はライブを見るチャンスが増えるので喜ぶと思います。県民会館の話に戻すと2千席なのか、2千5百席なのか、3千席なのかというのは、場所とコストの問題ではないでしょうか。3千人程度の会館をつくったとしても会館の使用、集客には何ら問題はないと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

佐藤寿彦委員の答えとしては、少々幅広い話になりそうです。

それでは、中田委員、お願いいたします。

【中田千彦委員】

私は、建築デザイン、地域づくり、まちづくりという論点でこの場に同席させていただいていると思っています。そのあたりから意見、コメントさせていただきたいと思います。

県民会館は昭和39年の開設で、ほぼ私と同じ年という、前のオリンピックが終わった後に華々しくこの定禅寺通に建ち上がって、当時は壁にもレリーフがあってケヤキも小さかったので、当時の様子は、それらも含めて誇らしいと思って開館されたと思えます。

それから五十数年たって、当時つくられた方が、54年後にこういう形で建て替えることが議論になるということについて、どう想像していたのかと思っています。20世紀の前半は戦争があったりしたので、後半の日本は成長の時代で、成長を謳歌するために多くの人々が、その成長と自分たちの苦楽をエンターテイメントで開放していくという時代だったと認識しています。世界の多くの国々はまだ人口が増

えてきて、成長過程の中でエンターテインメントは非常に重要な意味を持っていると思いますが、日本がこれから成熟していくときに、成熟する国家にとっては、エンターテインメントがさらにこれはウエルネスというか、そういった方向にバインドしていくという時代に差しかかかっていて、過去50年にあったような、エンターテインメントの意気込みだけが沸騰して、こういったホールとか興行施設ができるというのは、今の日本ではどうかと思っています。それは震災の経験もそうですが、どうやって共に後世に何かを伝えていくかということが大きな意味を持つ時代になっている中で、こういった公共施設の立ち位置、役割というのは50年前とは随分違っていて、その当時に気づかなかったことも数多く検証されてきていると思っています。

一方で、現在の県民会館の雰囲気は、佇まいがあって趣もあるので、それは一旦失ってしまうとなかなか手に戻せないものですが、現状では現在地で改修するというのはなかなか難しいことも多くの方が共有・共感していますので、ただ単に最新の技術で新しいものをつくと役割を果たすということではなくて、かつて我々の先代たちが培ってきた建物の趣のようなどころとか、佇まいのようなものをいかに継承していくのかというのは、大きな話題になると思います。

立地のことも関係しますが、文化の殿堂としての存在感というのは、やはり建築として考えていくことに意義があって、それにふさわしい建築を切望します。そういう意味では、御指摘のあったスペックや機能が、10年、20年もすればあつという間に更新が必要になって、今は喜んでいてもすぐに陳腐化する可能性が高い。特にこの50年、25年というよりもさらに加速していったら、もう10年や5年のスパンで何かしらの新しい技術、テクノロジーがやってきて、それに対応していかないと意味がなくなるのは想像に難くない状況の中で、それを踏まえた建築をどう考えていくのが重要なことだと思います。現状のプレハブのようなホールをたくさんつくっても、多分それは壊して建て替えれば済むという考え方になるのですが、県民会館はそういう立ち位置ではないと思うので、そのあたりは設計の中では重要な話題になるのではないかと思います。

それと連動するのですが、誰のためにつくるのかということが重要で、演者や来る人、そのときに手に入る最善のことが十分なときは満足しますが、そのホールというのが、この地域の人や、環境、日本のためというか、その存在がどのように社会的にトータルとして影響を与えるかということも重要視していかなければならない。そのときに誰のためにホールをつくるのかということが非常に重要なことであると思います。

いろいろな市民の方々の御意見がある中で少し聞こえてきているのは、市民の多くの人たちに開かれた場所であること。開かれるということは、ただ扉が開いているということではなくて、開いた形をどうするかということです。これまではイベントへのホールも入り口が小さくて、1階のありがたい入り口から出入りすることによってありがたい公演を見ることができる、特別な関係というのが保証されていたような形だったのですが、それは過去のホールの基本的なタイプです。今のさまざまな世界中のそういう空間では、そのような入り口はほとんど設置していな

くて、開かれたという解釈が多様化している中で、どういう開かれ方を採用するかがこれからのビジョンではないかと思っています。

そういう意味では、20世紀に培ったことをうまく生かしながら建築をつくっていくときに、今の建築のテクノロジーであれば、そうした要求にはほぼ応えられると思うのですが、その先どうやってこの建築、県民会館を後世に伝えていけるかということ、シナリオ、事業としての考え方としてきちんととらまえて、このプロジェクトを進行していくことを切に願っています。

建築においても、特に最近、世界中でグランドレベルという考えが重要になっていて、広がりがある、佇むことができる、人がそこで歩いたり、会話したりできる、そういう広がりがある街の中に持続性を持つてあるということが重要で、たまたま隣のメディアテークはそういう機能を十数年前に、20年ぐらい前に既に獲得をしているということは、仙台にとっての大きなリファレンスとしてあるということで、そうしたことも知見として、仙台としての望ましいホールが建ち上がることを期待したいと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

ありがとうございました。今まさに建築の立場から、後世に残る建物としての会館、そしてまた会館が地域に開かれるという観点でどう工夫がなされていくのか、こういうお話でした。これも一つ、考え方、観点として大事にしていかなければならないことです。

それでは、樋渡委員、お願いします。

【樋渡宏嗣委員】

私がSENDAI座プロジェクトという団体を立ち上げて13年になりますが、大きな立派な箱（ホール）ができるのはとても素晴らしいことだと思うのですが、私が東京から仙台に移住して最初に感じたことは、きちんとプレーをする場所がない、劇場が小劇場も含めて活動できる場所が少ないということと、それからきちんとしたプレーヤーを育てる機関がない。したがって優秀な人材はいまだに東京に流れていくという状況です。これからどんどん少子化になって、子供が少なくなっていく時代にあって、なんとか宮城県の中で劇場というものをベースにして、そこで人を育て、送り出すような、そんなホールになっていけたらいいと思っているのですが、様々な人がホールに集まって、例えばお年寄りの方がホールに集まって、そこで何か演劇をツールとしてコミュニケーションをとって孤立をしないようにするとか。そういう人が集まるという場としてのホールという考え方もあるのではないかと思っています。

現状の県民会館、昨日拝見させていただいたのですが、たしかに老朽化が著しくて、これに手をかけ、お金をかけてというのはあまり有効なことではないと思いますので、立地場所のこともありますし、新たな場所も何か設定をして建てられるというのが、ホールとしてこの先のことを考えるとその方向がいいと思いますが、このホールができた暁に、そこから何を発信していくのかということを考えて、そこ

から人を生み出して送り出していくという，そういったことも併せ持って考えて建てればいいと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

ありがとうございました。人を育てるホール，これまでハード面の議論をやってまいりましたが，そのソフト面や事業的な側面，これについても配慮が欲しいということです。そこから今度はハードもどうあるべきなのかというのが観点として出てくるというお話と伺いました。

【事務局 後藤環境生活部長】

佐藤淳一委員からもありましたが，仙台市の計画，考え方と宮城県の考え方の整理のところ，皆様にあまり明確にお伝えしていなかったと思いますので，今後の議論のベースとして，今どう進んでいるのかということで御理解いただいたほうがよろしいかと思っておりますので，少々補足させていただきます。

県民会館の建て替え，老朽化が進行してきたというのは十数年前から課題としてありました。それから，仙台市においても，音楽ホールをつくるという運動，佐藤淳一委員がおっしゃったように，10年，15年ぐらい前からずっとありました。県と市，両方のニーズといたしますか，リクエストが存在しておりました。

村井知事と，仙台市の前市長との間でも，その点に関して意見交換の場があり，やりとりをしてきました。一時は一緒につくってもいいのかというお話もありましたし，仙台市もホール以外の計画がありましたので，そういったものとあわせて県の計画等を多様な観点から検討しながらここまで来たというところがございます。そして，市長がお替わりになって，仙台市の音楽ホールに対する対応というのがより具体的になってきまして，市長がお替わりになっても，県と仙台市との意見交換というのは，知事レベルから事務レベルまでずっと継続してきております。

その中で，やはり仙台市としては音楽ホールを，象徴的に音楽ホールと呼んでいますが，そういった機能を担う会館を2千席規模でつくるという命題は，仙台市の政策的な課題，命題であるということで進んでいくという方向性がある程度出てきました。県としては，それに対してどう対応するかということで検討をしていたところがございますが，県の検討のスタートは少し遅れたということですが，その前提としては，仙台市がそういった形で，独立した形で音楽ホールをつくれるということで，それを前提にして県としても進んでいこうということで，それも知事と市長の間の意見交換を経ながら定まってきた形になっています。

それを具体的に表したのが今回の需要調査でございますが，仙台市がある程度機能的に特化した形の2千席のホールをつくる，そのときに県としてつくるホールには需要がないという結果が出てきたのでは，県としても対応する必要がないというか過剰投資になりますので，まず全国的な傾向からして，新しい会館は大体2千席規模程度でつくる，つくるのであれば2千席規模程度であるだろう，それを前提にして，それでは県として2千席の施設をつくるというときに，需要が果たしてあるのだろうかという前提で今回需要調査をさせていただいたということでございます。

す。そうした結果、需要が十分であるという結果が出ましたので、仙台市の構想と県の構想とで両立していくのではないかと考えて、この検討会をスタートさせていただいたのでございます。

そこは、基本的な機能のところでも申し上げましたが、一応音楽系とステージ系ということで、その機能的な棲み分けを十分に検討していけば、両方が2千席規模程度のものをつくっても、仙台市内、宮城県内における需要に対しては十分対応できるので過剰投資にはならないのではないかとという結論を出して、この検討会をスタートさせていただいたのでございます。そのあたりのところを御理解いただいた上で、今後の御意見をいただければと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

ありがとうございました。それについては、委員の皆様も共通認識されているのではないかと思います。その上での議論かと思えます。

意見が一回りました。私からもよろしいでしょうか。

今年、県民会館で「オペラ座の怪人」を公演して2か月半で11万4千人の集客があったということですが、これは県民会館が全国でも先鞭をつけた、既存の公共施設で劇団四季のロングラン公演をやるということが始まったのは県民会館が初めてです。それ以来全国各地で行われているということです。これは一つの歴史だと思いますのでお聞きしておきたいのですが、この構想ができた暁に、あのコンテンツは、強力なコンテンツのうちの一つ、佐藤寿彦委員の強力なコンテンツもたくさんありますが、劇団四季も強力なコンテンツでありますので、これについては今後どうなされるイメージがおありなのかをお聞きしておきたいのですが。

【事務局 鈴木消費生活・文化課長】

この有識者会議の皆様のお意見も頂戴しながら、そのあたりは検討してまいります。

【座長：志賀野桂一委員】

そうですね。わかりました。

【佐藤寿彦委員】

今、志賀野座長がおっしゃったので、我々の業界からいうと、先ほどの話を繰り返しますが、ホールの需要はものすごくあります。例えば、小田和正さんが今の県民会館でやったらどうなるかという勿論毎日ライブは出来ませんが1か月以上満員になるかもしれません。

【座長：志賀野桂一委員】

強気ですね。

【佐藤寿彦委員】

小田さんのライブはグランディ21でも1万6千枚ぐらいいは、すぐ売れてしまいます。東京ドームで開催したらチケットは20万枚売れるかもしれません。先ほどお話をした、宮城の嵐のライブは22万枚以上のチケットが売れており、そうしたマーケットがあります。需要調査の報告書には書いていないので、パーセンテージで音楽系の割合がどうかと書いてありますが、マーケットはものすごくあります。特に先ほど言ったように、高齢者もそうですが、中学生や高校生、大学生とか、若者の需要というのがとても多くて、それがこの動員数の底上げになっていると思います。

仙台市がクラシック音楽を中心とした音楽ホールの建設を検討していますが、僕の持論ですが、時間と経済に余裕がある人は、東京など県外に観に行く選択肢もあると思います。一方で新幹線料金が若者にとって経済的には厳しいので、若者らはバスに乗って東京へ行き仙台、宮城には来ないアーティストを観るという話を聞いたことがあります。僕はかわいそうだと思います。将来や未来のある若者について、宮城県の人口は今230万人ぐらい、その中に若者も相当な数を占めているので、若者にも喜んでもらえるような、おじいちゃん、おばあちゃんが孫と一緒にいけるような会場が近くにあってもいいと思います。

このように需要はものすごくあるので、劇団四季がどうかではなく、今はライブが活況で、この傾向は人口減で2050年には、8千万人、9千万人の人口であっても、テクノロジーの進歩で音楽のジャンルでいえばネット配信、無料で音楽が聞けるのであれば、さらに生のライブの需要が増え、交流人口もどんどん増えていくので、僕はその需要をどういうふうに見るかという議論は何も問題なく、建設、運用コストと歳入、これだけが課題だと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

需要ありというお話ですね。

【佐藤寿彦委員】

現在の県民会館は、利用予約が抽選でなかなか使えない状況ですが、弊社でも1年間は使用できるほどの需要があります。その需要は全国的も同様です。横須賀もおそらくそうでしょうし、静岡も需要はあると思います。

ただし、仙台市の新しい音楽ホールがクラシック仕様でホールに反響板をつけてしまうと、かなり稼働率は下がるでしょう。反響板があるホールの中で財政的に日本で成功しているものは無いと思います。アクロス福岡が典型例と聞いています。稼働が悪くクラシックの反響板の問題で、変更を余儀なくされました。仙台市もそうならなければいいと、個人的には思っています。

【座長：志賀野桂一委員】

アクロス福岡は、もっと別な問題がありまして、あの反響板は取り外しできて、劇場系に使えるというのですが、劇場系に使うにはスペックが全くプアです。むしろ

ろシューボックス型で使っていれば問題ないのですが、もう一つ欲張って使おうとしたのですがうまくいかなかったという結果だと思います。

【佐藤寿彦委員】

アクロスは我々がやっている音楽、ポップスに関しては、全く使えませんでした。途中から使用要請が来たのですが、使えなかったと聞いています。おそらく歳入のバランスが悪いとやはり自治体は悩むのでしょうか。やはり需要、運用等を踏まえた設計が肝要だと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

アクロス福岡のホールはクラシックホールです。あそこでポップス系をやろうとしても無理だと思います。

それでは、ほかにも全国のたくさんの事例を見ている方で、宮城県がこれからつくるホールを想定したときの、良い例、悪い例、いろいろとあるかと思いますが、コメントをいただきたいと思います。

【片山泰輔委員】

県立のホールの持つ機能に関しては、劇場法が2012年に制定されたことの非常に重要なポイントは、劇場というのは建物だけを指すのではなくて、創意と知見を持った専門的人材がそこに配置されているものをもって劇場、音楽堂だと定義している点です。一方、基礎自治体が設置している施設でそれだけ充実した人材が配置できるかという点、なかなかそこは難しいといえます。劇場法の第16条に基づいて国が出した指針の中では、地域の基幹的な施設は、人材育成などの面でそうでない施設と協力すべきだということをやっています。そういう意味では、県内の基礎自治体が設置したいろいろなタイプの施設の人材育成の場として、県の施設が機能を果たすことが必要かと思っています。

えずこホールのように、自前で相当できているところもありますが、県内の市町村の多くのホールはまだそういう状況にはないと思いますので、そういった人たちの人材育成の場として機能する部分を持つことが、単に2千席、3千席の興行をやる施設でもなく、仙台市がつくる施設とも違う意義を持つものとして、県の施設の機能としてはあるのかと思います。やはり市町村への支援が重要です。沿岸部の施設なども、復興に向けてまちづくりに取り組んだりしているのですが、なかなか人材のところでは十分ではないという声が聞こえてきます。そういった人たちの研修の場や、様々な支援ができる施設であることが重要です。公演を基礎自治体と共同制作して一緒にやるとか、そういう機能が県の施設として、もっと欲しいと思います。現在地で、あの形だと当然このような機能は持てないのですが、新たにつくるということであれば、県内の市町村を特に人材の面で支援できるような機能が欲しいと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

ありがとうございます。片山委員がおっしゃる背景といたしますと、2001年にできた文化芸術振興基本法があって、2017年に文化芸術基本法に改正されたばかりですし、劇場法というのも2012年にできています。数年前にようやく公共ホールのあり方のようなものが、法的にもはっきりしてきました。その中には、おっしゃるような人材育成だとか、いわゆる開かれた、まさに市民の広場としてのホールというものをやりなさいといったことが打ち出されています。それに応えることも当然のことながら、県民会館は広域の文化芸術を担うセンターとしてのホールということになりますから、それを目的とされるのだらうと思います。

では具体的な建物に落とし込んだときに、そういったものはどういう場所や、スペースが必要になるのかという話になるのだらうと思います。今皆様から意見として出た、現状の県民会館の場所は、キャパシティーもさることながら、そういった機能も盛り込もうとすると、相当厳しいのではないかという話が出てまいりました。さらに言えば、道路からの搬出入の問題というのが相当大的な問題で、とても大変ということも聞いています。

【佐藤寿彦委員】

付近の住民に迷惑をかけているのも事実です。

【座長：志賀野桂一委員】

そういうことがありますので、現在地で建て替えるとすれば、かなり小さい、ダウンサイジングでコンパクトにつくる考えもありますが、そうだとすると与えられた命題と異なってきますので、その問題もおのずと方向が見え始めているようです。

もう少し話を詰めていきたいと思いますので、今まで一巡、二巡をしていますが、まだお話をされていない方からもう少しお話をいただきます。

【天沼ひかる委員】

今皆様のお話を伺っておりまして、その劇場、ホールができたときに持たなければいけない機能というのが、この何十年かで要求が増えてきて、それが完全にできるかどうかというのは難しいところです。県であればその機能的なものを分散させるような形で、一つ一つがそれに集中して、全体的に構成した段階で県民のためになると思います。

それから、劇場などは、交流人口をものすごく生み出すものなので、横須賀市の例にすれば、私たちが統計をとれる限りのものにおいては、来場者の半分は市民ですが、例えばクラシックの演奏家の中でも、とにかく最近話題であるとか、知る人ぞ知るような方の演奏会をやることも刺激が必要だと思っていますので、しっかりリスクを背負って手を出しています。そのときにいらっしゃる来場者は7割が市外からです。そういった境界を取り払った形での事業展開も必要で、それが様々な聴衆を呼びますし、劇場は閉鎖的な場所ではないので、そういった感覚も大事だと思います。市民活動の助けになる必要もありますし、バリアフリーの関係でいろいろ

とやるべきだと言われていることもあります。今ないものは何かというのがその地域に課題としてあるのであれば、まずそれを充実させるということを考えて、何をやっても最終的に受け入れられる、そういった場所があるというのが一番良いように思います。

実質に携わっていて大事なものは、市民もいらっしゃるのですが、プロフェッショナルな方たちにも育成的な部分でのサポートは大事です。劇場の機能が高度であっても、中身がなければ何もないというのが実際のところで、それを担っていく方というのは、ステージの裏で働く方、運営される方ということの育成や、経験ができてという場が必要です。特に、舞台の裏回りのお仕事というのは今ブラックだと言われますが、そのつくり出す場において、相当なエネルギーが必要ですし、そういった部分の育成は大事です。国のほうが先んじてやっていないので、今でも民間の方が結局頑張っているという状況は変わらないと思います。いろいろと皆さんがやりたいことがあると思うのですが、そこをどうやって選んでいくかが難しいところであり、でもやらなければいけないというのが、積極的に、最終的に引っ張っていく部分が大事だと思います。

仙台市のこともあるとは思いますが、大きな場所があれば、全国大会がいろいろとありますから、そういったものもその地で行えるというのは大事なことだと思いますし、何でもできるということをキーワードにして、それが何のためなのかというのが明確になると全てうまくいくような気がします。簡単ではありますが、そのように思います。

【座長：志賀野桂一委員】

かなり運営面のお話も含んでいると思いますが、私も横須賀芸術劇場に行ったときに、駐車場があって、劇場の駐車場は来場者のためだけにつくると遊休化します。それを全部、夜も貸して、民間に貸すような仕組みだとか。また、横須賀芸術劇場の会員制度は、当時としてはかなり早かったと思いますが、クレジットカードと連動してやっているというシステムをとられていまして、経営的にも先進的な事例であったのではないかと考えていますが、経営的な面でそれはまだ続いていますでしょうか。

【天沼ひかる委員】

今、クレジットカードをつくることはやめて、基本的にいろいろな形の支払いが可能なものになっています。

会員組織は、地域の結びつきというのがありますが、あの劇場ができるまでエンターテイメントはほとんど配給されなかったエリアですので、そういったものに人を近づけるということで会員組織をつくりました。割引制度もありますし、主催事業も年間50本以上はやらせていただいているので、そういった部分では、チケット販売において、販売的な意味で劇場が持っているプレイガイドの充実ということにも費用をかけています。それ自体はコスト的にはあまり利益が出るものではないのですが、市民サービスということにも通じることもありますし、いろいろと市民

と手を結びますが、ほかの地域の方々とも関わっていきたいということで全て展開していきまして、それはアマチュアでもプロフェッショナルでもということで、全部垣根を外して、劇場という場所で何かが行われて、そこに集まる人がいて、それを見たり聞いたり感じて何かが生まれてくるということは、その効果だと思っているので、それを限られた予算と、独特のいろいろ大きな制度をとっていますが、先ほどおっしゃっていただいた駐車場の営業をしているのも、私たちが事業費を、あまり素敵な言い方ではないのですが稼ぐためにやっています。サービス面においても、私たちは営業的なことを最初からシステムとして強いられるような形でやってきていますので、チケット販売の営業にも行きますし、お客様へのサービスや、ホテル並みにまではいかなくても、環境整備についても心を砕いて、できる範囲内でやらせていただいて今があるということです。

一方で、やはり横須賀市の経済状況というのも影響がありますので、それによって劇場のほうは揺れ動くことになります。指定管理者制度で一定の予算をいただいています。横須賀芸術劇場の場合は施設を管理する経費に相当する分しかいただいております。それ以外は基金で少しずつ生まれてくるお金はあるのですが、貸館を含む自分たちの営業活動と、助成金をいただくとか、協賛金をいただくとか、今は市民の方からの寄附金などもいただいで、それで合唱団を、大人・子供を含めると今300人以上になりますが、そういった活動も一つ集中できるものを選んで、例えば演劇的な面はとても弱いのですが、そういった部分については、県内で手をつないで取り組んでいこうという動きが神奈川県では始まっておりまして、この場所がどうあるべきかという課題はいろいろあると思いますが、皆さんが幸せになれるように運営できればと思って日々葛藤しているところです。

【座長：志賀野桂一委員】

ありがとうございました。今は、そういう芸術文化のセンターとしての機能に腐心されて、限られた予算の中でやっているという状況が横須賀芸術劇場の例ではないかと思えます。

先ほど、同じような御意見もいただきましたが、樋渡委員はどうですか。

【樋渡宏嗣委員】

我々の立場から申し上げますと、確かに2千席規模のホールというのがこの場所に必要なのかというのがありまして、もし立地が現在地に限られるということであれば、無理に大きな箱をつくらずに、4百席、5百席規模のホールにして、そこから生み出されるもの、仙台は演劇の基地という劇場が存在していないので、東京でいえば紀伊国屋ホールであったりとか、本多劇場であったりとか、3百席、4百席規模の劇場でも構いませんので、きちんとした劇場でクオリティーの高い作品を送り出せる、そういった質の高いホール、小規模であってもいいのでそういったホールをつくり、そこを僕らが若い頃はそういう劇場に出演することに憧れて切磋琢磨してきたように、今の宮城県、なにかんづく東北の若い人たちが、将来はあそこの劇場に立ってプレーをしてみたいというように、そういう憧れの場所となるようなもの

が発信できれば、若い人の流出が防げるのではないかと、宮城からそういった次世代を担う演劇人としての人材が輩出できるのかなと思っています。

演劇というのは、大きなホールというよりは、役者の細かな表情であったり、息づかいであったりが手に取るようにわかるといった意味で、そのライブ感がとても大切なことで、それによってまた見たいなということ、それから劇場というところでも敷居が高いと思われがちの方が多いので、劇場に足を運ぶということは敷居が高くない、常に劇場に、その場所に行くとなんか体験できてとか、人との交流ができてとか、そういう体験型の施設としての劇場というあり方もこれからは必要なのではないかと思われまいます。大きい箱は仙台市のほうで整備するのでこちらにお任せをして、県民会館だからこそできるという、そういうホールのあり方があっていいのではないかと考えております。

【座長：志賀野桂一委員】

この会議で話題が出た前提としては少し異なるところがあるのですが、演劇人としての思いということでしょうか。

今までの議論を含めて佐藤淳一委員はいかがでしょう。

【佐藤淳一委員】

やはりコンサートがないときであっても人が集まってくるような、そういった、先ほどもセンターというお話がありましたが、そういう機能を持つ県民会館であってほしいということはずっと思っていましたので、ハード面だけではなくソフト面も重要になってくるのだらうと、そのようなものができたら一県民としてはとてもうれしく思います。

今、演劇の話もありましたが、2千席規模ということで、例えば大ホールと小ホールなどの選択肢がある、立地のこともあるのだと思いますが、そういったことが広く可能になるようなところに、新しく建てるのであれば、敷地もあって、施設もいろいろ選択できるような、そういう場になれば、より素敵ではないかと思っています。

【座長：志賀野桂一委員】

私からも加えて申し上げますと、県民会館で第九を毎年やらせていただいています、ホールは第九ですが、その日の練習は県民会館の全館、隣の会議室も全部借りてやっています。また、楽屋が全く足りなくて、いつも大変な思いをします。これからの劇場、ホールをつくる時のポイントとして、楽屋周り、裏側のアメニティーというか、環境というか、それはとても大事になっているので、先ほどの何のためにつくるのかというような議論になってきます。その会館の評価というのは、やる人がスムーズにできるという、搬出入も含めてですが、楽屋の周りの条件などで決まります。それが県民会館は、老朽化でいつの間にか古いタイプのホールになってしまった。そこが一新されるだけでも新しく県民会館をつくる意味があるのではないかとさえ、僕は思っているのですが、個人的にはそういうところがしっかり

解消されるような楽屋の広さと、廊下、楽屋も含めてということになると相当なスペースが必要かと思います。

外国のホールへ行くと、それほど充実してはいないというところも多いのですが、例えばリンカーン・センターのメインの楽屋というのも、豪華で立派というものではないのですが、それなりの機能は備えていて、同じフロアの中に全部備わっていると、基本条件はきっちりされています。これからのつくり方、機能というところでは大事な観点なのではないかと思います。

外国の事例も、中田委員はいろいろと御覧になっていると思いますが、先ほど象徴的な存在としてのホールということも言われたと思いますが、やはり市民の広場があって、そこに大きな教会があって、その向かい側に劇場があってというのが多い場です。そういう意味でも象徴的になるのですが、いかがでしょうか。新しいホールの機能という面でのお話ですが。

【中田千彦委員】

今、楽屋のお話があったと思いますが、何年か前に歌舞伎の襲名披露公演があって、たまたま幼なじみはその襲名をした歌舞伎役者なものですから、ちょっと楽屋に入ったのですが、さすがに歌舞伎界の方は身のこなしが良くて、狭い階段をスタスタと、黒子の方から役者の方から身のさばきがとても良くて、それはある種の芸だと思ったのですが、一般的に見れば、そういう状況の中で身のこなしがいいことが普通ではなくて、それをうまく使い倒している感じがありました。もし自分がそういうことで何か絡むとそれは大変だなというふうにしみじみと、相当のプロでも、自分たちが気を遣わないと、あの場所を使いこなせないのだなということを実感しました。

そういう意味では、現状については課題もたくさんありますし、一方で古い建物でそういう不自然なところもたくさん世界にはあると思います。おっしゃっていた中でも、リンカーン・センターは、へき地、場末につくって、そこで映画の人たちが、イブニングドレスを着た人たちがリムジンでやってきてという風景をつくることによって、あのウエスト・サイドが活性化していくということをニューヨークは20世紀に成し遂げたのですが、一方で、我々が考えたいと思っているそのホールというのは、カーネギー・ホールのようなものでもないし、パリのオペラ座のような、ある種の象徴性の中での芸術の最先端、最頂点を堪能するための特別な空間というものでもないでしょうし、一方で、最近できたロサンゼルスディズニー・コンサートホールは、それも本当にスラムのところに美術館ができて、マンションができてということで、あそこもかなり地下の駐車場が充実していて、コンサートがないときには一般に開放している、ダウンタウンに近いということで、うまく営業的にも、あの形を存在させるために苦勞をしている部分もあります。

そういう知見を生かしながら、このホールがどうできていくのかということが大事で、まだどういうところにできるかということはこれからの検討事項だと思いますけど、一方で、現状の場所がどうなるかというのが大事な要素だと思います。既にいろいろな型、アクティビティーがある中で、現在地にはそれなりの気配があり

ますし、建物そのものはいろいろときついこともあるかもしれませんが、そこにある目的を持って集う人たちがいるという歴史があって、それが更地になって、いつしかよくわからない商業施設が建っているというような状況では、移転したことが裏目に出てしまうこととなります。現在地で培ったことがあるからこそ、今回の移転のことや、改築のことがとても重要な要素だと思っているので、その後、県としても現在地が、残されたところをその場所に関わる人たちにどう受け継がれていくかということが重要で、それがあからこそ新しい建物が生き生きとしてくることが、私は語られるべきだと思います。海外の事例などは、移転をしてその跡地になったところがどうなったのかといったことも、たくさん良い事例があると思いますので、それをリコメンドしながら検討して考えていくべきかと思います。

【佐藤寿彦委員】

この資料に、県民会館のキャパシティが1590席として書いてありますが、30年ほど前は1780席ぐらいだったと思います。そこを皆様の頭にもう一度入れ直してほしいと思います。(※建設当時から平成元年まで：1732席)

何を言いたいかというと、五十数年前にできた建物であれば、今は周りの景色が変わってきます。マンションが建ったり、トイレが温水洗浄便座になったり、自宅の前に電球がついたり、周りの環境がどんどん変わっていく、だから味があってとても素敵だと思うことは僕もあります。

ただ、お金の話ばかりして恐縮ですが、全部あるというのは本当に理想です。我々の会社も現在の県民会館から歩いて3分ぐらいのところなので、なくなるのは忍びないです。寂しいとは思いますが、近くで便利、仕事するのもいいと思っていますが、お金の問題ではないかという気がしています。車道から客席まで10メートルとか20メートルというホールが、果たしていいのかということも考えてほしいと思います。現在地がどうなるか僕もわかりませんが、百億円単位のお金が動くわけなので、先ほども言いましたが宮城県民1人当たり1万円ぐらいの負担になるので、新しく建てる場合には宮城県民が年に2回ぐらいは来られるような、物産館があったり、いろいろなものがあつたりするような建物になってほしいと思います。

先ほど、志賀野座長が言ったように、白鳥が湖で泳いでいると下は一生懸命水かきしているような、その水かきする場としてあの場所は、搬出入という部分とか楽屋もそうですし、さっき言ったトイレもそうです。女性のトイレが極端に、世界のワースト何番目に入るぐらい少ない。僕があので会館に来たときに思います。搬出入も24時間体制ぐらいに思い切った考えでやらないといけない。そうでなければ最近でいうコンテンツ、それがなかなか提供できないのではないかという気がします。現在地でなくなるのは惜しいと個人的には思っています。もう一つあって、たくさんホールがあればいいなとは思いますが、あとは財政の問題だと思います。

最後につけ加えますが、僕らの業界でもLCCのような言葉が最近生まれてきて、宮城県ではピーチエアラインが来て、ローコストキャリアという飛行機が安くなるということがありますが、我々の業界でもローコストアリーナというのが、昨年進出してきました。それは何かというと、建築基準法はクリアしながら、中田

委員がおっしゃる箱だけですが、50億円ぐらいで大体1万人ぐらい入るような、スポーツができて、歌舞伎やクラシックもできるような、そういった箱と電源しかないようなものがローコストアリーナという形で昨年リリースされております。冒頭に言ったコザ市につくる施設もそういう形になると思うのですが、いろいろなもの、多種多様なものは絶対必要となるのでしょうか、どこかで財政を引き算で考えて、宮城に残す、子供たちのためにも、そして中田委員がおっしゃったような県民が喜ぶものを引き算で考えることも必要なのではないかという気がしています。

僕は移転で新しい、22世紀に向かったものをぜひつくっていただきたいと思います。

【座長：志賀野桂一委員】

ありがとうございました。大分時間となってきましたので、最後に片山委員にお願いします。

【片山泰輔委員】

今日は初回ということで、ハードの話が中心になったかと思いますが、先ほども劇場法の話を出しましたが、どういう人員を配置する施設にするのかという議論が大事だと思います。一番大きな2千席のホールで、自主制作をやるのか、それとも基本的には貸館でやるのかで随分変わってくると思います。県立の施設でも、びわ湖ホールとか、兵庫とか、自主制作でオペラなどをつくっているところもあります。それをやるとすると相当なスタッフをそこに置かなければいけないのですが、それをどうするのかということです。

ただ、私が先ほど必要だと言った、県内の基礎自治体との連携のようなことになると、それはかなりの専門的スタッフが必要になります。3百席とかそれぐらいのホールを使って共同制作をするとか、そのためにはかなりきちんとしたスタッフが必要ということになると思います。教育普及をするのもスタッフが必要ということになると思いますので、計画を立てるときには、ハード面でどういう建物をつくるのかということに加えて、どういうスタッフを、どの機能に、何人を配置していくのかというイメージも含めて議論をしていく必要があります。それはコストに跳ね返ってくる話でもありますので、次の会議、議論のときには、ぜひいろいろと検討していく必要があると思っていました。

【座長：志賀野桂一委員】

ありがとうございました。非常にいい議論をしていただいたように思います。今回は拠点文化施設のあり方というところを中心に、その機能だとか、それからどういう実演芸術をやるのか、どの辺がメインのターゲットになるのかというお話、そしてそのほかの運営、人材育成の問題やら、そこの今後の長期展望における拠点性というか、機能というものも考えていかなければいけないということ等々、多岐にわたってお話をいただいたように思います。

今日1回限りではありませんので、様々な論点が出て特にハードとソフトという

ことになるのですが、それを次第に整理しながら、次回はこの全体の流れからすると、現状の場所というのは少し違うかもしれないという中で、それではどこでどう整備するのかということになると、なかなかこれは難しい問題です。そのあたりを含めた議論を、今後の可能性がどの程度あるのかという話もしていければよいのかと思います。

(議事終了)

8 その他

事務局から次回の会議開催の調整については後日改めて行う旨を説明した。委員からの質疑はなかった。

以 上